

平和が いちばん

2016年2月15日
第 104 号
平和で豊かな枚方を
市民みんなで作る会

「辺野古新基地建設反対」の非暴力の粘り強い運動が続けられています。市民の会の仲間も現地の行動に参加して頑張りました。(1月24日 下段「投稿」参照)



美術館白紙へ 市民の力

香里ヶ丘中央公園に予定されていた美術館の建設計画が白紙に戻されました。先月、市長は「美術館及び総合文化施設の整備」方針を発表しました。それによると市は寄付者に対して「建設は困難、白紙に戻す」ことを申し入れ、「協議が整えば総合文化施設内（ラポール北側が予定地）に美術館を整備する方向で調整を進める」とされています。「大切なことはみんなで決める」という市民自治の観点から、香里ヶ丘中央公園での建設を白紙にして新たな方向を検討することに私たちは賛成します。これは市長の選挙公約でもあります。

約二年前、市民はこの計画を突然聞かされました。前市長が自ら「イレギュラー（変則的）だった」と反省するほど市民不在、地元住民無視に進められました。また議会でも賛成した議員が「負の遺産になる可能性が高い」と疑問を投げかけるなど、議論が煮詰められないまま条例化がされてきました。計画案が市民に周知されいろいろな意見が出された上で議会が判断する

という市民自治の基本が忘れられた点に最大の問題があります。

前市長の独善的な計画は撤回されました。ここに至ることができたのは「市民無視の建設反対」を掲げて続けられた市民の粘り強い運動です。工事の強行を許さない「見守り行動」を厳冬・酷暑に耐えて1年4ヶ月にわたり続けたこと、美術館計画がどこまで周知されているか「シール投票」を市内各所で行い、数度の全市ビラ配布や宣伝行動、市長に対する申し入れと関係課との面談、議会に対して二度の請願と意見陳述、そして住民監査請求など考えられるいろんな市民の運動が積み重ねられてきました。またこの運動と議論の中から絵本『アラカシのもり』が作られ、市内の全図書館に配架されていることも特筆すべきことです。

この美術館計画は市の文化行政の発展に寄与するものでなければなりません。そのためには市民が参加して設立の理念とコンセプトを明確にしていくことが何よりも大切だと考えます。

投稿

辺野古現地の闘いに学ぶ 松田久子

一月二三日〜二五日まで沖繩の辺野古に行ってきた。二四時間体制で寝泊まりされている方の話を聞いたり、日頃は関係者以外あまり入ることのできないテント（というより家屋のような団結小屋）の中にも入らせていただきました。長期間の闘いを支えている態勢を肌で感じることもできました。

ヘリパッド基地反対の運動を続けている高江の現地へも行き、ここでも二四時間体制で抵抗闘争が行われていることを知りました。行った日は台風並みの低気圧による突風が吹き荒れていました。そんな天候はもともせず闘っておられる現地の人々に、ただただ敬服するばかりでした。辺野古と同じようにこの高江でも沖繩以外の多くの支援者の訪問があり、広がりを知ることができました。

一月二三日〜二五日まで沖繩の辺野古に行ってきた。二四時間体制で寝泊まりされている方の話を聞いたり、日頃は関係者以外あまり入ることのできないテント（というより家屋のような団結小屋）の中にも入らせていただきました。長期間の闘いを支えている態勢を肌で感じることもできました。

機動隊の暴力的な行為も目の当たりにしました。市民を突き飛ばしたり、歩道に押し上げた人を数名の機動隊員が取り囲み押付けて拘束するのです。

このような状況下で毎日攻防を繰り返している現地の人々。「あきらめないことが勝利する道」と頑張っておられますが、大変なエネルギーとしたたかさが必要だと感じました。選挙結果にも一喜一憂することなく淡々と闘う沖繩の人々。緊張の中にも歌あり、踊りありと元気です。この闘いを孤立させず、さらに分厚くて熱い本土からの支援の重要性が強く感じられたツアードでした。

原発NO



戦争NO

1月20日 市議会全員協議会 美術館問題への市の考え方に質問。市長の提案内容は一面記事通り。計画「白紙へ」は地元の方々をはじめとした市民の粘り強い取り組みの成果だ。しかし「前市長による市民無視の独善的な美術館建設計画」がこのような混乱を招いた原因であるにも関わらず、市長は「何故このような事態になったか」の私の質問に正面から答えず、「市議会において議決いただいた案件を、座り込みなどの妨害行為で覆されることは到底容認できない」と、市民運動への無理解、敵視の答弁。市長は美術館建設問題から真摯な総括をしていないことがわかった。市民無視への反省がなければ、総合文化・美術館建設も市民の合意を得るのは難しい。市民参加での検討が不可欠だ。地元は、森のフェンスが撤去されるまでは見守り活動を継続する。

1月23日～25日 全交沖縄辺野古連帯ツアーに参加 24日、25日の早朝、キャンプシュワブゲート前のテント村を訪問。ここは権力の妨害を排してテントを拡大し、運動の拠点・交流の場として活用されている。25日早朝、車両の出入りに積み上げられたコンクリートブロックを機動隊が撤去して工事用車両が進入。400個で約15分間遅らせることが出来た。車両の進入後、私たちは撤去されたブロックを再度積み上げた。この繰り返しは1日何度も行われる。積み上げられるブロックが多ければ多いほど工事は大幅に遅れる。全国からブロックのカンパが続いている。300人集まれば工事用車両は進入できない。新基地建設は阻止できると現地の人々は確信している。歌やカチャーシュ、参加者からの連帯メッセージもある。全交、向日市、枚方の報告もした。大根踊り「安倍おろし」も披露された。悲壮感でなく明るく楽しい参加者の連帯感が作られる。開放的な空間がテント前だ。高江のヘリパット設置反対のテント、辺野古海岸のヘリ基地反対協のテントも訪問。こ

こも誰にでも開放されている。今回のツアーを通して運動は参加者の創意を活かし楽しくやらなければと痛感した。

1月22日 1月分議員報酬から219,600円を大阪法務局に供託

意見箱

私が住み続けたい町は・・・

加藤 充孝

生後7か月の長男を育てています。そんな私にとって住みよい町とはどんなものなのか考えるこの頃です。

核家族化が進む現代都市において、両親だけで子どもを育てていくことはとても困難です。そんな時にやはり力になるのは地域のコミュニティであったり、子育てをサポートしてくれる地域の社会資源だったりするのだと思います。自分たちのことを良く知ってくれている人たちが地域にたくさんいる、お互いがお互いをよく知っている、助け合える、そんな地域はきっととても住みやすい。そう思います。

それは私たち子育て世代に限らず、高齢者世帯や障がい者世帯、すべての世帯にも同じく言えることだと思うのです。行政が主体的に行うことではないのかもしれませんが、地域の中で住民がつながりを持ちやすい仕組みを作ることが魅力的な町づくりにつながっていくのだと思います。たとえば子育ての支援サークルやサポート組織、その拠点づくり。そこに地域の住民や高齢者に関わってもらい仕組みづくり。高齢者も介護されるだけの存在ではなく、地域の住民として参加できる、それが生きがいにもつながっていくと思うのです。

それとももちろん保育園の増設も必要で、4月を前にもう待機児童が出ているような現状では、枚方は子育てのしやすい街だとは決して言えないでしょう。友人も1歳になる娘を保育園に預けて4月から働きに出ようとしたら現在働いていない人は優先順位が低いと言われ、希望の保育園に入れずに途方に暮れています。

市長は駅前の再開発や教育の充実によって人口流入を図ると言われますが、どこにでもあるような、どこかで見たことのあるような開発された駅前には現在、決して魅力的なものではないと考えます。箱モノや目に見える大きな開発ではなく、地域に根差した地道な取り組みこそが住民を元気に幸せに、最終的に枚方を魅力的な町、住みよい町に変えていくのではないのでしょうか。

〒573-0027

枚方市大垣内町

2丁目8-27

シンエービル別館A

市民の広場“ひこばえ”

TEL&FAX

072-846-8780

平和で豊かな枚方を市民みんなで作る会

共同代表 黒田 薫 (平和都市枚方を考える市民の会)

鈴木めぐみ (親子のリズム遊び講師)

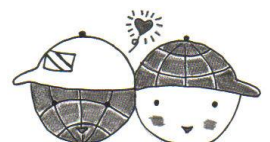
奥村 秀二 (弁護士)

おおた幸世 (枚方市平和無防備条例を実現する会)

事務局長 手塚 隆寛 (枚方市会議員)

メールアドレス : hiratkatasiminnokai@yahoo.co.jp

ホームページ : <http://hiratkatasiminnokai.jimdo.com/>



塔本賢一さん作